J-STAGE NEWS：
J-STAGEニュース
No.23
電子ジャーナルの最新情報をおとどけするJ-STAGE機関紙
ISSN 1346-1990
2010年3月31日発行
独立行政法人
科学技術振興機構

今号の記事：

●J-STAGE10周年を迎えて
●J-STAGE利用者の声（1）：J-STAGEの進展への期待
●J-STAGE利用者の声（2）：J-STAGEの電子ジャーナル化に大いに期待
●シリーズ学会訪問　～J-STAGE利用学協会様の声～［社団法人日本セラミックス協会様］
●J-STAGE利用学協会意見交換会報告（東京・大阪）
●大会演題登録システム終了のお知らせ
●J-STAGE600誌達成・アーカイブ100万論文達成報告

J-STAGE 10周年を迎えて

JST（独立行政法人科学技術振興機構）研究開発戦略センター長　吉川弘之

J-STAGEは無事に10周年を迎え、参加学会誌数が600を超えた。開拓者として決して楽な10年ではなかったと思うが、順調な発展を心から喜びたい。

世は情報化時代と言われ、私たちの日常生活も大きな影響を受けている。行政、金融、医療などのサービスも、情報化によって様変わりである。情報の氾濫という批判もあるが、そんなことにお構いなく情報化は進展する。その中で気になるのは、科学者の中に論文の電子化に対する逡巡があることである。膨大な歴史的研究成果が紙に蓄えられているのを目の前にして圧倒されるとき、それが電子になってしまうことへの抵抗を私ももちろん感じるが、電子化の利点はもはや議論の段階ではない。

ところで学協会が担う科学情報の電子化は、単に科学者にとっての利便性や我が国の研究の国際発信というという目的達成に留まらない重い意味を持っているように思う。研究するものとしての科学者は、研究の成果を学協会を通じて発表する。成果は情報であるが、それは世の中で言われる氾濫する情報とは違う。科学者の研究成果は、研究目的の正当性、論理的正しさ、実証性、過去の研究に対する独自性などに十分配慮しつつ科学論文を書き、それは専門を同じくする査読者によって厳密に査読され条件を満たしているかが確認される。それを満足したものが公開される。しかも発表した論文はもはや公共的なもので、著者といえども訂正は許されず、他の研究者はその成果を自由に使う。その時引用の明示は言うまでもないことである。

このように多くの“雑誌”と同じような形態で出版される情報であるが、学協会の出版する学術誌の情報は、厳しい条件を満たすように作られた情報であり、科学的知識という大きな情報集合に組み込まれる。一般社会はもはや科学的知識という情報なしに過ごすことはできないのだから、その存在の重さは限りなく大きい。

私は、情報化時代といわれることの本質は情報の増加よりも情報へのアクセス可能性の向上であると思っているが、そのアクセスが社会的に秩序を失っていることは間違いなく、今後必ず問題となる。国家による統制は論外であり、表現の自由といわれる“情報の自治”は守らなければならない。問題は一般に流通する情報に、自律的に倫理性を担保する方法への見通しがないことである。その時、科学情報に関する私たち科学者の努力が、社会における“発表の自由”を歴史的に確立してきたという事実が参考になる。

情報の自治を確立するために、科学者は情報化社会の進展を先導すべきなのではないか。科学の世界では、アクセスできる情報に自律的な条件を課している。一般情報に科学の厳しさを求めるのは意味がないが、情報提供者の規律が社会的に確立していくような何らかの過程が必要である。その先駆者としての規律の可能性を、科学者は逡巡するのでなく情報発信の電子化を積極的に推進することによって主張していく責務があると思う。

J-STAGE 利用者の声(1): J-STAGE の進展への期待

前 静岡大学長 興 直孝 先生

私は我が国の科学技術の国際的な展開を図る重要な方法として、アジア地域において燦然と輝く科学技術雑誌の必要性を主張してきました。アジア地域の学協会の財政基盤は脆弱であり、また民間活動も期待できず、それまで指摘されてきた情報発信の遅れを脱却する方策を打ち出すことが出来ないままでは、この地域の科学技術の相対的地位の向上が図れないと憂慮されます。日本が出来るアジアの科学者のための国際協力・貢献の具体的なテーマがここにあると考え、国による支援の必要性を訴えてきました。しかしながら、学協会や民間機関がジャーナル誌を独自に刊行している中なので、時限を切った支援措置でなければなりません。かれこれ10数年も経過しましたが、その実現を図るには、私の力では多くの方々をその気にさせるだけのものにはならず、実現には程遠いものでした。

J-STAGE の新しい展開はそうした思いが叶えられる取組みでした。科学論文の投稿・受付から審査・査読までの工程を導入するシステムへの転換です。種々の難しい局面にあった時に、日本化学会、日本物理学会、日本応用物理学会を始めとする学会の方々のご努力に加え、ノーベル賞受賞者の野依良治先生が日本化学会会長になられ、その意義を強調されたのは、これらの動きを一段と確かなものへとさせました。アジア諸国の研究者の方々が日本化学会の雑誌に関心を示し、論文の投稿の動きも顕在化してきたのです。そうした動きは関係者の心の支えになり、21 世紀の初頭、私は JST の専務理事として、第2段階の J-STAGE2 の開発に携わることが出来ました。

J-STAGE への海外からのアクセスダウンロード数が、平成20年度実績で約1,480万件、登載誌のインパクトファクターが2008年実績で対前年度5.4%向上した事実、また、投稿実績についても確実に増加していること、登載記事へのアクセスした国数は200になり、その中で、日本に次ぐ中国に欧米諸国のアクセス数が並んでいる。利用の学協会数は今年3月時点で600となっており、約9割の利用学協会が海外発信力強化に役立っているとの回答が示されるなど、学協会の満足度は高いとうかがっています。

J-STAGE は、確実に国際的な関心が払われるような段階になってきていますが、これからの問題は、国際的に評価される情報媒体としての確固たる地位を今後、築いていくことです。世界トップの情報発信機関とのリンケージは講じられているようですが、良好な連携関係の構築が図られるように希望します。また、検索に掛かる収録論文数については、東京大学で170百件、京都大学で98百件、産業総合研究所で53百件、理研で14百件となっています。この収録数が適切なレベルであるのか、収録論文が適切なものであるかどうかの評価はし難いですが、意義のある論文が検索対象から除外されないことを期待します。研究者との協働作業が促進され、我が国の科学技術情報の有効な発信の樹立を願っています。

プロフィール：昭和44年東北大学大学院理学研究科化学専攻修士課程修了。
昭和44年科学技術庁入庁後、在オーストリア日本国大使館一等書記官、宇宙開発課長、宇宙企画課長、長官官房会計課長、官房長、原子力局長、内閣府政策統括官（科学技術政策担当）等を歴任。退官後、平成13年科学技術振興事業団専務理事、平成16年（財）日本科学技術振興財団専務理事、国立大学法人広島大学理事（非常勤）・副学長を経て平成19年～平成22年3月まで国立大学法人静岡大学長。平成22年4月から、新たに公立大学法人化された静岡文化芸術大学理事（教育・研究担当）に就任。
専　門：科学技術政策
所属学会：応用物理学会
趣　味：観劇、論理的思考能力の涵養

J-STAGE利用者の声(2): JSTの電子ジャーナル化に大いに期待

日産化学工業株式会社 研究推進部戦略技術担当部長 新井和孝 様

海外の学会誌の電子ジャーナル化は非常に進んでいます。その利便性に慣れた眼で見ると、日本の遅れは非常に気懸かりでした。そんな中、JSTの和雑誌の電子ジャーナル化が非常なスピードで進んできたことは非常に心強いことで、日本の研究開発促進に大いに貢献すると確信します。

これまでは、日本の、特に古い学会誌を調べたいとき、保存されている図書館を先ず見つけ、巻号頁が分かっている場合はともかく、じっくり調べようと思った場合は、実際に訪問し、限られた開館時間を気にしつつ、古色蒼然とした本を手作業で調べ、必要そうな部分の複写をお願いして持ち帰っていました。それが今は、自分のパソコンでいつでも好きなだけ調べられ、本当に必要なところだけを抜き出し、電子的に整理もできるので本当に助かります。

自分の利用例を挙げます。当社の創業技術者の高峰譲吉は、タカジアスターゼの発見やアドレナリンの精製・結晶化に成功したことで有名ですが、その前に日本初の化学肥料会社（当社の源流、東京人造肥料会社）を創業するために東奔西走し遂に成し遂げた人でもあります。その同時期に、日本の特許制度整備を進めつつ、自身の発明を欧米へ特許出願するという先鋭的活動を進めてもいたのです。

この高峰譲吉をSciFinderなどで検索すると、海外の特許出願は多いが論文報告は少なく、日本で講演はしたが論文報告は少ない人だと自分も考えていました。が、Journal@rchiveが整備され調べてみると、日本にも論文を出しており、特に「東京化學會誌」に主要業績「副腎の主成分アドレナリンについて」という重要な論文を発表したこと、いろいろな集会に参加し、活動もしていたこと、が浮かび上がってきました。
これまでの個人的な調査力が弱かったともいえますが、JSTの和雑誌の電子ジャーナル化が和文献の調査力を一気に引き上げしてくれたお陰であり感謝しています。

この他にも、この「東京化学会誌」を調べ直すだけでも化学史関係で面白いことがいろいろ分かりそうです。さらに最近は、その他の多くの和雑誌がかなり新しいところまで電子化され、調べ易くなっています。自分の直接係わるところでも、有機合成化学協会誌が、第26巻（1968）から第63巻（2005）までほぼ全ての論文が公開され、調査がサクサクと進み非常に助かっています。

このような中、一つお願いしたいのは、検索方法の充実です。日本らしい改良をぜひお願いしたいです。既にある程度考慮されているようですが、漢字は複雑です。高峰の場合も、本人自身が、高峰のほかに・峯も・嶺も使っており、このほか旧漢字や類似漢字もあります。同一視検索機能付与を、ぜひよろしくお願いします。
さらに昔の日本には改名を頻繁に行う慣習があり、また昔は他人を指す時に当て字も多く、歴史研究者泣かせです。著者名検索は非常に難しいです。検索方法を誤ると業績評価など大きく誤ってしまいます。仏様になるときの戒名は別としても、改名は止めて欲しいですね（笑）。

そもそも日本の文献は海外の検索に拾ってもらえず、日本語文献に英語のアブストラクト作りを遡及するJICSTの努力以前は、日本語の報告は業績としてゼロ評価だったと思います。少し大げさかもしれませんが、JSTの電子ジャーナル化、検索方法充実を進めると、海外からも辿り付き読まれる日本の論文数が大幅に増やせ、日本人研究者の業績評価がさらに上がると思います。これからも注目しています、大いに期待しています。

プロフィール：昭和51年東京大学大学院理学研究科博士課程修了。
昭和51～53年 相模中央研究所客員研究員。昭和53年 日産化学工業（株）入社。
研究所に長く勤務後、本社研究推進部へ、現在に至る。
専門：有機化学。
所属学会：日本化学会、米国化学会、有機合成化学協会、高分子学会、
化学史学会。
趣味：水泳、化学史。

〔シリーズ学会訪問〕～J-STAGE 利用学協会様の声～

［社団法人日本セラミックス協会］

今号では、日本セラミックス協会の英文誌『Journal of the Ceramic Society of Japan』の編集委員長である吉川信一先生を訪問し、お話を伺いました。吉川先生は、現在、北海道大学大学院工学研究科物質化学専攻で教授をされています。

日本セラミックス協会様は、セラミックスの産業および科学・技術の発展を目的 として 1891 年（明治 24 年）に設立された我が国唯一のセラミックスに関する総合学術産業団体で、無機・有機・鉱物・化学・物理・電子・土木・医 療・工芸など広範な分野の方々が参加されておられます。

英文誌『Journal of the Ceramic Society of Japan』は、2003 年から J-STAGE 上で公開され、投稿審査システムも活用されています。また、近く Journal@rchive でも過去分が公開される予定です。その他、日本セラミックス協会年会・秋季シンポジウム講演予稿集も 2002 年から J-STAGE で公開中です。

◆　◇　◆

ー貴学会と欧文誌のアピールをお願いします。

セラミックス・無機材料・ガラス分野においては、新しい産業創成につながる力強い息吹が基礎研究のみでなく応用研究においても、特に日本から生まれつつあること、地球温暖化の問題の解決に、セラミックス材料・技術の発展・活躍が期待されていることを考えますと、本誌の重要性は、ますます大きなものになると認識しております。

編集委員長　吉川　信一先生

ーJ-STAGE で公開されていかがでしょうか。効果はありましたが？

J-STAGE の投稿・審査、制作・編集、公開までの一連の機能を便利に使わせていただいています。この結果、かなりスピードアップされて、論文が世界に公開されていると思います。論文誌の英文化と相まって J-STAGE の利用によりインパクトファクターが 1 を越えるようになったことに感謝しています。

インパクトファクターについては、いろいろと問題もありますが、今後、さらに高めていきたいと考えております。

ーJ-STAGE の改善点、J-STAGE3 へのご要望などお聞かせください。

実務を行っている事務局からは、確認画面が多すぎる、操作性が悪い、英語画面の意味がわかりづらい、アクセス統計に Google Analytics のような機能を充実させて欲しいなどの声を聞いています。

J-STAGE3 では、是非とも、これらの改善をお願いしたいと思います。

ー今後の英文誌の方針について

アジアを代表するジャーナルとして、欧州、米国の主要なジャーナルと肩を並べて行きたいと考えています。このために、ジャーナルの質の向上が必須で、①編集委員会をインターナショナル化する。②投稿から公開までのレスポンスを早める。③レビュー記事を載せ、お互いに切磋琢磨する。このような方針で、今後とも、臨んで行きたいと考えております。

なお、本年の大きな行事として以下の行事を予定しています。

1）年会：　3 月 22 日～24 日、東京農工大学

2）第 3 回セラミックス国際会議（3rd International Congress on Ceramics, ICC3）
　　11 月 14 日～18 日　大阪国際会議場“グランキューブ”

この第 3 回セラミックス国際会議（ICC3）は、世界の 50 以上の国から 2,000 人規模の参加者が期待できる大規模な国際会議で、今後のセラミックスの新しい展開を“セラミックスの知”を集めて話し合い、今後も変わりようのないセラミックスの重要さと今後の研究開発の方向を、世界中から参集する友人たちと確認する非常に重要な機会です。

ーありがとうございました。今後も学協会様に役立つ J-STAGE となるよう頑張って参ります。

J-STAGE 利用学協会意見交換会報告（東京・大阪）

＜1/29 東京 2/10 大阪＞

J-STAGE 利用学協会を対象に、平成 21 年度 J-STAGE 意見公開を 1 月 29 日東京で、2 月 10 日には大阪で開催しました。東京は約 70 名、大阪会場で約 20 名のお申込をいただき、学会事務局や編集委員の皆様にお集まりいただきました。

まず、

●J-STAGE／Journal@rchive の状況

●次期システム（J-STAGE3）の開発

について JST より報告しました。J-STAGE3 は来年度から基本設計を開始しますが沢山の質問をいただき、関心の大きさが感じられました。また、オンライン投稿審査システムに対するご意見や改善要望も多く頂きました。今後とも利用学協会様、閲覧者等ユーザの皆様のご意見も聞きながら開発を進めてまいります。

東京会場の様子：新宿モノリスビル会議室にて

休憩を挟んだ後半では、参加学協会様同士のグループディスカッションを行いました。まずはイントロダクションとして、JST が行った「現況調査報告（電子ジャーナル品質管理調査）」について簡単にご紹介し、このあと、グループに分かれて「ジャーナルの品質向上について」というテーマで 1 時間弱ほど、フリーディスカッションの時間を取りました。これは、参加学協会様同士のネットワーク作りや、皆様が普段抱えている課題、問題などをざっくばらんにお話しいただける場にしたいという企画です。

大阪会場：チサンホテル心斎橋会議室の様子

多くの学協会様が、投稿の質と量の確保、査読者の確保や審査時間の短縮など、共通する問題をお持ちで活発に議論がなされました。また、電子投稿導入による投稿者の多様化、海外からの投稿増加などに伴う二重投稿や剽窃（盗用）論文のチェックの問題についても議論されました。このような剽窃チェックについては、CrossCheck という、CrossRef 参加機関へのサービスの利用を希望する声もあり、JST でも導入に向けて準備を進めております。

昨年度から始めたフリーディスカッションですが、学協会様の横のつながりを作る場、情報交換の場として、アンケートでもご好評を頂いております。今後とも、セミナー、イベント等と合わせて、日本の学術雑誌の情報発信力強化に役立つ企画を考えてまいります。

なお、本意見交換会の内容、資料詳細については J-STAGE の HP でも公開しておりますのでご覧下さい。

（URL：http://info.jstage.jst.go.jp/society/meeting/）

大会演題登録システム終了のお知らせ

JSTでは平成19年度の「科学技術論文発信・流通促進事業アドバイザー委員会」における提言を元にJ-STAGEサービスの見直しを図り、今後はジャーナルの公開・情報発信に重点化していく方針とし、このため平成20年度より大会演題登録システムの新規の利用申請受付を中止し、既にご利用されている学協会様には当面の間、過渡的措置としてサービスを継続させていただいております。

この度、アドバイザー委員会での最終確認を経て、次期システム（J-STAGE3）の開発・運用開始に合わせ平成23年度末をもって、本暫定措置を終了し、大会演題登録システムを停止する方向となりましたのでご連絡致します。ご利用学協会様におかれましては、これまでの支援に感謝するとともに、サービス停止へのご理解を賜りたくよろしくお願い申し上げます。

J-STAGE600誌達成・アーカイブ100万論文達成報告

平成22年3月17日、J-STAGEのジャーナル登載誌数が600誌となりました。皆様に育てられながら満10周年を迎えたJ-STAGEですが、ジャーナル600誌到達とともに投稿審査システム利用誌数も100誌を超えております。

アーカイブ(Journal@rchive)選定誌を中心に、登載誌拡大

JSTでは、平成21年度まで、「電子アーカイブ事業」において資料的価値の高いジャーナルについて創刊号まで遡って電子化を行い、Journal@rchiveサイト(http://www.journalarchive.jst.go.jp/)で公開しています。

今年度についてはJournal@rchiveでの登載を契機に、最新号（カレント号）についてもJ-STAGEへの登載をお申し込みになるジャーナルも多く、これらの雑誌については創刊号から最新号までの電子公開・閲覧が可能になります。

さらに広範な分野をカバー

J-STAGEの正式名称は「科学技術情報発信・流通総合システム」ですが、この「科学技術」には人文科学・社会科学等も含まれます。これまで一般に、わが国においては人文・社会科学系ジャーナルの電子化についてもあまり進んでいないといわれてきましたが、J-STAGEを利用して電子化を行う人文・社会科学系の学協会様が着実に増加しつつあります。

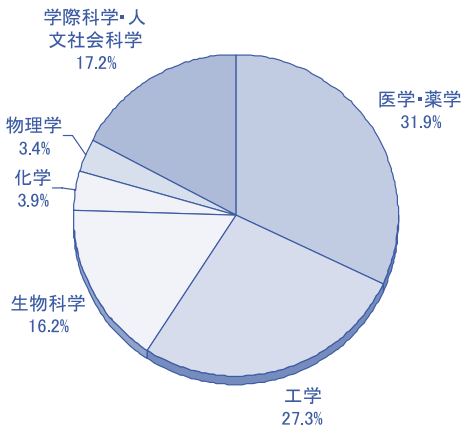
J-STAGEは、データ作成・登載者である学協会様と事業運営者であるJSTが両輪となり共同して発展させてゆくプラットフォームです。今後ともご関係の皆様、そして閲覧者の皆様には、J-STAGEを一層ご活用くださいますようお願いいたします。

Journal@rchiveでの過去分公開も100万件

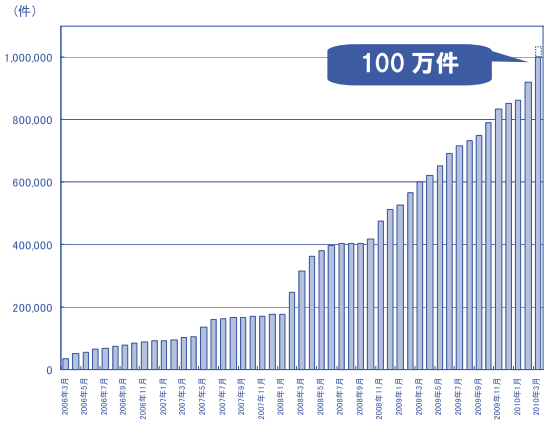
また、Journal@rchiveにつきましても、登載論文数が100万件を突破いたしました。

今後とも、日本最大級の電子ジャーナルサイト・J-STAGE／Journal@rchiveをご愛顧くださいますよう、何卒よろしくお願いいたします。

J-STAGE ジャーナル分野別比率（2010.3.1 現在）



Journal@rchive 登載記事数の推移



編集後記

♪平成11年度のJ-STAGE運用開始からまる10年となる節目の年、3/17にJ-STAGEのジャーナル公開数が600誌となり、翌日18日にはアーカイブ公開論文件数が100万件を突破しました。投稿審査システムの本格利用も本年1月には100誌を超えております。5月からはいよいよJ-STAGE3の開発が本格的に始まります。次の10年のスタートに向け、電子ジャーナル担当一同これからも誠心誠意取り組んで参ります。引き続き、参加学協会の皆様、図書館関係等ユーザーの皆様にはご指導・ご支援を賜りたく今後ともよろしくお願い申し上げます。(YM)

J-STAGE ニュース No. 23 2010年3月31日

編集:独立行政法人 科学技術振興機構（JST）
イノベーション推進本部 研究基盤情報部 電子ジャーナル担当
発行人 研究基盤情報部長 大倉 克美
〒102-0081 東京都千代田区四番町 5-3 サイエンスプラザ
電話 03-5214-8837(ダイヤルイン)
E-MAIL contact@jstage.jst.go.jp

J-STAGE http://www.jstage.jst.go.jp/

J-STAGE および J-STAGE ニュースに関するご意見・ご質問をお待ちしております。 JST 研究基盤情報部 電子ジャーナル担当（contact@jstage.jst.go.jp）